《報　告》

2015 Annual Meeting of Chinese Society of Nuclear Medicine（中華医学会全国学術年会）報告

（2015 年 5 月 3 日（日）～ 5 日（火））

京都大学医学部附属病院　放射線診断科
石守　崇好

（核医学 **52**: 55–56, 2015）

日本核医学会および中国核医学会のご支援を頂き，上海市において開催された標記の中国核医学会学術総会（中華医学会全国学術年会）に参加する機会を得た．

当方初めての訪中で全く勝手が不明であったが，第二軍医大学上海医院の程超医師に空港までお出迎え頂き，まず同院を見学させて頂くことになった．お聞きすると 2,000 床以上ある大病院とのことで，下の写真が「影像楼」という放射線部門の建物であるが，お城のような大変立派な建築である．

SPECT と PET はそれぞれこの中の少し離れた場所にあり，PET/CT は Siemens Biograph 16 が 1 台，SPECT は Philips の 2 検出器型 SPECT と Siemens Symbia T (SPECT/CT) が 1 台ずつ設置されていた．PET/CT はデリバリーで FDG のみ行っていて，1 日あたり最大 30 件前後，朝 8 時から夜 21 時頃まで撮像しているとのことで，その件数に大変驚いた．一方で SPECT は 1 日 20 件程度で，「PET と比べると少ない」とのことであった．読影医はそれほど多いわけではなく，日本での後期研修医相当の修練医 1 名＋指導医 1 名のペアで 1 日行う体制で，一人 1 日 30 件以上読影すると

いう．修練医に1件あたりの読影時間を聞いてみると，「簡単なPETだと15分，難しいときは1時間以上」とのことで日本の感覚とほぼ同じであるが，件数からみても「朝から深夜まで」読影していることになり，日本並み以上にhard workerばかりであった．

核医学の症例検討にも少し参加させて頂いたが，拝見した中では「正体不明の感染症」など炎症に関連したFDG-PETや，施設間の医療レベルの差異も影響した可能性のある「見落とし例」など，社会背景を考えさせられる内容が興味深かった．「患者から医師ないし医療機関へのクレーム」は社会的にも非常に多いそうで，お金での解決も多いが「患者が医師を殺害する」事例もあるそうで，なかなか大変な社会である．「職業としての医師の人気」があまり高くなく，医師全体的に人員確保の問題があるとのことでもあった．

核医学以外の放射線部門も拝見したが，日曜日というのに「緊急でない」CT・MRI検査が施行されており，患者さんが待合に並んでいて当番医師も読影していた．救急のCTは日曜日でも100件以上行われ，CT・MRIは平日の場合は一人1日60件以上読影するとのことである．「3D画像再構成ルーム」が整備され，日本では珍しいほどの台数のワークステーションが設置されていたが，再構成に関しては時間がかかるため「数日の猶予」をもらって処理しているとのことであった．

翌日，中国核医学会学術総会での講演の機会を頂き，当施設における臨床分子イメージングの現状を中心にお話しした．学会規模は日本核医学会より小規模と思われ，また英語でのセッションはそれほど多くなかったものの，会場の席は熱心な参加者でかなり埋まっていた．SNMMI会長のDr. Herscovitchをはじめ米国核医学会の先生方も多く招待されており，核医学の領域で中米・中日の交流が今後ますます活発となることが期待された．

今回の活動が日中間の交流に多少ともお役に立てば幸いである．

最後に，今回の参加にあたり大変お世話になった組織委員会の袁志斌先生，程超先生，また中国核医学会長の李先生をはじめ中国核医学会の皆様，また日本核医学会でこのような交流の機会を与えて頂いた井上登美夫理事長，外山宏先生にあらためて感謝申し上げたい．